

スコロバチ Н.Р.

## 北サハリンと樺太における国民教育の状況の比較（1905～1925年）

本報告は、ソヴィエト政権が樹立される前の北部サハリンと日本領の南部サハリンにおける国民教育の状況を比較するものである。

1904-05年の日露戦争は、ただでさえ劣悪だったサハリンのロシア人住民の生活環境を急激に悪化させた。この政治的事件の悲しむべき帰結として、住民の算を乱しての島外脱出があった。ポーツマス講和条約によってロシア側に残された北半分でさえ、住民は住み慣れた土地を棄て、大陸に渡ることに全力を挙げたのである。

サハリン島軍務知事ヴァルーエフ少将は、日本の当局からサハリンの北半分を受領するため極東に派遣され、1905年10月7日アレクサンドロフスク哨所に到着した。「1905年および1906年の北部サハリン事情についての上奏文」において、ヴァルーエフ少将は状況を次のように伝えている。「サハリン島に日本人が出現するやいなや、住民の大多数はうまくいっている経営すら打ち棄て、大陸に脱出した。以前、人口は3万5000人に達していたが、そのうち残留者はほとんど8分の1でしかない<sup>1</sup>」。さらに軍務知事は報告する。1905年の冬、島内で「国民教育省管轄下の学校は1校も開設されず、専門の教員は1人もいなかった。そこで監獄付属の学校を開設し、その名に似つかわしくないことではあるが、流刑囚を教員に任命せざるをえなかった<sup>2</sup>。」

サハリン島民の生活環境はきわめて困難な状態にあった。残留を決めた住民は、苦役の時代に定められた規範を引きずった生活をしていたのである。

ヴァルーエフ少将はこの「上奏文」のなかで、1906年に「国民教育省は二級式学校をアレクサンドロフスク哨所とレイコフスコエ村に計2校、単級式学校をコルサコフ村、ノヴォミハイロフスコエ村、デルペンスコエ村、オノル村に計4校開設した」と報告している。あわせて6校の省立校が1906年に開設されたのであった。

一方、1905年に島の南半分に形成された樺太庁の管内では、日本人による集約的な開発がはじまった。日本人は道路と鉄道を敷設し、産業企業、炭鉱その他の鉱山、あらゆる通信システムを建設していった。

南部では、日本による占領から1年を経た時点で早くも日本の教育システムが形成されるようになった。島の日本領における国民教育システムは、1906年8月8日、豊原の以前教会だった建物に官立の8年制初等学校が開設されたのをもちて嚆矢とする。樺太民政署はその職員2人を同校の教員に任命した。生徒は全部で20人であった。

同年、8年制初等学校がさらに2校開設された。大泊の学校は、生徒数212人、教員2人、真岡の学校は生徒97人、教員3人であった。こうして、1906年に樺太では3校の官立初等学校が機能し、全体で学級数は12、生徒数は533人、教員数は8人であった<sup>3</sup>。

---

<sup>1</sup> ГАСО. Ф. 1038. Оп. 1. Д. 34. С. 2.

<sup>2</sup> ГАСО. Ф. 1038. Оп. 1. Д. 34. С. 13.

<sup>3</sup> ГАСО. Ф. 1170. Оп. 1. Д. 40. С. 94.

樺太庁の管内では、人口の急増にともない、児童数も急増した。村の住民は自分たちの子供に教育を受けさせる必要性を感じるようになった。当局は官立の学校を建設する時間がなかった。そのため住民自身が私費による私立学校開設のイニシアチブを發揮した。ダリネエ、トロイツコエ、ホムトヴォなど、児童人口がさほど多くないところでは、生徒数70人から15人程度の小規模の学校が開設された。のちに、このような学校は他の集落にも広がってゆく<sup>4</sup>。

さらに1年後（1907年）、樺太庁の管内の官立初等学校は3校（学級数23、教員数14人、生徒数1287人）、私立初等学校は5校（学級数5、教員数5人、生徒数155人）を数えた。あわせて8校の初等学校で1442人の生徒が学び、19人の教員が働いていた。さらに学校のほか、樺太庁の管内ではさまざまな場所に簡易教育所が開設された<sup>5</sup>。

国民教育システムの形成に関して樺太庁の管内でとられたこのような積極的措置は、日本側の当局が市民の教育に多大の関心を払っていたことを物語るが、同時代のロシア政府については、このようなことはなかった。

「1907年の北サハリンにおける国民学校の現状に関する報告」のデータによれば、島のロシア部分には1907年当時2つの管区（アレクサンドロフスク管区とトゥイモフスク管区）に4校ずつ、あわせて同じく8校の学校があった。アレクサンドロフスク管区におけるアレクサンドロフスク哨所の二級式学校、ノヴォミハイロフスコエ、コルサコフスコエ、アルコヴォの各村の単級式学校、トゥイモフスク管区におけるオノル、デルビンスコエ、ヴォスクレセンスコエの各村の単級式学校、ルイコフスコエ村の二級式学校がそれである。北サハリンの学校に勤務する教員は単級式学校に1人ずつ、二級式学校に2人ずつ（上級教員と下級教員）、合計10人であり、在校児童数は男子256人、女子159人、合計416人であった。

以上に紹介したサハリン島の南部および北部の統計データから明らかなように、学校数こそ同一ながら、在校児童数では北部と南部のあいだに1対3.5くらいの開きがあった。

ある文書館資料には、1908年にルイコフスクとアレクサンドロフスクの両管区に単級式学校が8校、アレクサンドロフスク哨所に二級式学校が1校存在するという県の官房の報告が引用されている。在校児童総数は240人、教員は11人であった<sup>6</sup>。すなわち、1908年に北サハリンの学校網は1校を加えて、いまや9校となったのである。ルイコフスコエ村に二級式学校があったとは、どこにも報告されていない。アレクサンドロフスク哨所には、1903年に開設された実業学校が引きつづき存在していた。

一方、樺太庁の管内では、1908年になると初等学校がすでに23校に増えている。内訳は、官立が3校で、学級数26、教員数24人、生徒数1492人、私立が20校で、学級数23、教員数23人、生徒数618人、合計すれば、学級数49、教員数47人、生徒数2110人であった<sup>7</sup>。1908年に

---

<sup>4</sup> Лим С. Ч. История развития школьной системы на Сахалине (1855-1945). М., МГУ, 1999. С.43.

<sup>5</sup> ГАСО. Ф. 1170. Оп. 1. Д. 40. С. 80-81.

<sup>6</sup> СЦДНИ. Ф. п.-1. Оп. 2. Д. 2. С. 33.

<sup>7</sup> Стефан Д. Сахалин. История. /Перевод с английского В. В. Переславцева. // Краеведческий бюллетень. 1992. №2. С. 94.

樺太庁が公布した「私立学校補助規則」は、教員の俸給に対する補助金の支給を義務づけるとともに、私立学校の運営責任は村長に課せられる、とした。1906-08年における樺太庁管内の学校現勢を表1に示す。

1908年におけるロシア側と日本側の学校のデータを比較すると、日本側では学校網の急成長をみることができる。学校数は前の年のほぼ4倍に増えた。ロシア側はといえば、学校数の増加はただ1校にすぎない。北部サハリンにおける学校事業のこうした状況は、ロシア人住民の大幅な減少がその一因である。

日本側の学校はロシア側に比べて、教員数が4倍余り、生徒数はほぼ10倍多かった。

表1 樺太庁内の初等学校（1906-08年）

年	種別	学校数	学級数	教員数	生徒数
1906	官立	3	12	8	533
1907	官立	3	23	14	1,287
	私立	5	5	5	155
	合計	8	28	19	1,442
1908	官立	3	26	24	1,472
	私立	20	23	23	618
	合計	23	49	47	2,090

1908年3月の勅令第45号および内務省令第6号に基づいて、同年4月には、私立の初等学校、幼稚園、聴覚・視覚障害児童のための学校その他各種の学校の整備に関する庁令第8号が公布された。1909年になると、東海岸の落穂と西海岸の多蘭泊に島の先住民のための教育所が開設された。先住民のための学校整備は、彼らの地域的分布や居住条件が考慮された。彼らには授業に必要な全教材が支給された。学校開設が不可能とされた地域では、彼らの集落に最も近い初等学校が先住民児童の教育において機能を果たす義務を負った<sup>8</sup>。

ここで北部サハリンに立ち返ってみよう。北部サハリンでは、1911年に1校が開設され、翌1912年に学校数はあわせて13校となった。アレクサンドロフスク管区長Ф. А. リャホヴィチのプリアムール総督宛ての報告書によれば、アレクサンドロフスク管区では4校の国民学校で教育がおこなわれていた。「アレクサンドロフスク哨所の二級式学校、コルサコフスカ、ミハイロフカ、アルコヴォの各村の単級式学校がそれである。そのほか、アレクサンドロフスク哨所に『H. Л. ゴンダッチ名称女子教区学校』がある<sup>9</sup>」。また、10月革命の5年前、北部サハリンに教員は20人いたが、そのうち5人は「神の法」という科目を教えていた<sup>10</sup>。

こうしたことから言えるのは、北部サハリンでも、男女児童を教えるための普通の初等学校とならんで、しだいに、中等学校としての実業学校や、初等学校の変種としての女子教区学校といった異なるタイプの学校が登場するようになったことである。そのほか、従来一度も学校の存在しなかったスラヴォ村というような所にまで学校が開設されている。

1912年、樺太庁の管内では国民教育システムの改造が引き続き進行するなかで、官立の中学校が大泊に開設された。1914年の時点で、北部サハリンの学校は14校をかぞえた。この数字は、「農民共同体報告」「1929-30年国民教育サハリン管区報告」「サハリンにおける普通教育

<sup>8</sup> ГАСО. Ф. 1170. Оп. 1. Д. 40. С. 187.

<sup>9</sup> РГИА ДВ. Ф. 702. Оп. 1. Д. 5. С. 75 об.

<sup>10</sup> Старииков Г. Ф. Советский Сахалин. Хабаровск, 1940. С. 49.

計画・労働者クラブの会議録」といった一連の資料の中で言及されている。「サハリンにおける普通教育計画」には、人口、学校数、生徒数、教員数、教員の授業負担について裏付けとなる統計表が掲載されており、この統計表からは、人口1万0373人の北部サハリンに1913-1914学年度14の学校があって、424人の児童が学び、あわせて27人の教員が教え、教員1人あたり平均16人の生徒をもっていたことがわかる<sup>11</sup>。

1916年、北部サハリンには単級式学校が15校、二級式学校が2校あった<sup>12</sup>1925年、ソビエト政権樹立の時点で、北部サハリンの学校は21校をかぞえた。「サハリンのソビエト化の日に当たる1925年5月12日現在、学校網は、実業学校1校、単級式学校19校、二級式学校1校から構成され、生徒総数は835人であった<sup>13</sup>。」

サハリン島の日本側とロシア側で学校建設の指標を比べてみよう。日本側では1920年にすでに6年制128校、8年制6校、あわせて134校、学級数232、教員数214人、生徒数8686人の公立初等学校があり、そのほかに6年制1校、8年制3校、あわせて4校、学級数54、教員数53人、生徒数3785人の庁立初等学校があった。初等学校の総数は138校、生徒総数は1万2471人という計算になる。

このほか、南部サハリンには中学校があった。大泊では、1915年の10月7日に私立の大泊女学校が開校した。

1916年4月6日づけの勅令第93号により、女子中等学校のシステムが発足した。1916年5月1日には、官立の豊原高等女学校で授業がはじまる。これは、官立では最初の高等女学校とみなすことができる。校舎は、一時的に古い兵舎を利用したが、1920年には特別の建物に移った。1925年には、新たに1校の官立高等女学校が開校した。

官立の高等女学校の修業年限は5年制の豊原高等女学校を除いて、4年であった。高等女学校は、どこでも国家体制への敬意とか、穏和で温厚な気性とか、丁重で質素、有徳の人格の形成といった教育の目標が追求された。これらの教育機関では女学生の体力向上も重視されていた。

樺太庁の管内で、当局は単に学校の建設に意を注いだだけでなく、教員養成の講習会なども組織した。講習会は学校の休暇中に実施された。講習会の課題とされたのは、普通教員免許を持っていない教員の教育水準向上であった。課程の修了時に受講者は試験

表2 官立高等女学校の学級数・教員数・卒業生数

	学校	学級	有資格教員	無資格教員	卒業生数
1916	1	1	4	1	0
1924	1	5	9	4	31
1926	1	9	15	1	65
1930	3	29	51	4	199
1934	4	34	63	4	250

(ГАСО. Ф. 1170. Оп. 1. Д. 40. С.108.)

<sup>11</sup> СЦДНИ. Ф. п.-2. Оп. 1. Д. 78. С. 1.

<sup>12</sup> СЦДНИ. Ф. п.-2. Оп. 1. Д. 78. С. 34.

<sup>13</sup> СЦДНИ. Ф. 2. Оп. 1. Д. 78. С. 1.

を受け、合格すれば正教員の免許状が与えられた。

国民教育システムの改良と学校運営に関わるすべての方策は、樺太庁および「樺太教育会」のイニシアチブのもとで実施された。その中には、ア) 校長協議会、イ) 勉強会、ウ) 先進的な教員の研究発表会、エ) 学校運営や学科目別の研修、オ) 然るべき計画に沿った授業参観の実施、などがあった。さらに1920年からは、樺太庁令によって教員の出向が行われた。それは2つのカテゴリーがあって、第1種の教員グループは知識向上のため1または2年間、研究機関に出かける。第2種の教員グループは教育現場を視察するため4か月から1年間出かける、というものである。ロシア側には、北部サハリン各管区長が教育機関に対して実施する検査や監督を除くと、これに該当するようなことはまったく行われなかった。

1922年の樺太庁令第22号によって入学試験規則が定められ、官立の各中学校・高等女学校はこの規則に従って、独自に試験を実施した。

樺太庁の管内では、私立の初等教育機関があり、大泊中学校に教員養成課程が設けられ、私立と官立の幼稚園も開設された。大泊の幼稚園は1921年8月、豊原の幼稚園は1923年5月に活動を開始している。1920年9月には私立学校に関する勅令が公布された。これに基づき、真岡には女子裁縫学校が開設された。

教育システムに対する指導は、国家機関が勅令や庁令に基づいて実施した<sup>14</sup>。

結論を述べれば、同じ国民教育システムといってもサハリン島の南部（樺太庁の管内）と北部とでは非常に大きな相異があったという点を指摘することができる。日本政府は、あらゆるタイプの学校をつくり、教員の養成や資質向上のための講習会を組織し、幼稚園や先住民児童の教育のための学校を開設するなど、多方面にわたって自国住民の教育プログラムを集約的に実施した。サハリン島のロシア側はといえば、教育分野の改善は遅々として進まなかった。島を拓殖し、積極的に開発しようとするロシア政府の試みはすべて徒労に帰した。北部サハリンの住民数は非常に少なく、学校はわずかししか建設されず、子供たちのどのような教育需要にも応えることができなかった。ロシアの学校は、資質の高い教員の不足、教材の不作、なにより資金の不足に苦しんでいたのである。

原暉之訳

---

<sup>14</sup> ГАСО. Ф. 1170. Оп. 1. Д. 40. С. 143.